

19

豆腐小僧と天然痘について

竹原 直道

九州歯科大学

舌出しや一つ目で描かれ、紅葉豆腐を盆に持つ豆腐小僧という謎の妖怪が注目を浴びている。その豆腐小僧と、江戸時代の死因の一、二を争う感染症であった天然痘（痘瘡、疱瘡）との間に関係があるのではないかとの仮説のもとに、豆腐小僧と痘瘡神図像との比較検討を行った。その結果、興味ある知見が得られたので報告する。

背景

豆腐小僧

豆腐小僧は1775年から1806年の間に出版された絵入りの草双紙、黄表紙本のなかに登場する。その姿は童形で、頭が大きく、大笠を被り、手に紅葉マーク入りの豆腐（紅葉豆腐）を乗せた盆を持っている。豆腐小僧とは何者なのか、なぜ豆腐を持っているのか、その存在の意味は不明とされてきた。

疱瘡絵

当時、江戸では天然痘が大流行していた。天然痘は、なかでも小児の死亡率が高く、感染すると運良く死ななくとも、顔に痘痕が残り、目に入ると失明した。しかも当時病因は不明で、一旦流行すると為す術がなかった。そのため、天然痘は疱瘡神によって起されると考えられ、治療と予防のために様々な呪法が試みられた。病除けの民間療法として、疱瘡神の詫び証文、疱瘡踊り、疱瘡送り、疱瘡祝いなどの習俗があった。その一つが疱瘡絵で、紅刷りの絵が天然痘除けの呪力を持つ護符として用いられた。疱瘡絵の絵柄には、桃太郎、金太郎、源為朝や頼光など伝説上の武将の姿、またみみずく、だるま、でんでん太鼓、鯛車、春駒、犬張子などの玩具が描かれていた。疱瘡絵は無事天然痘が快癒すると川に流す風習があったので、現在残っているものは少ない。

疱瘡神

疱瘡神図像はいくつかの錦絵、疱瘡絵本などに登場する。その姿はいわゆる鬼の姿をしたもの、老人姿のもの、童形のもの、一様ではない。このことから疱瘡神の図像イメージが一定していなかったことが窺われる。

結果と考察

以上の背景を踏まえて、いくつかの黄表紙本の豆腐小僧と、描かれた疱瘡神図像を比較したところ、その着物の柄に共通する玩具模様が認められるものがあった。その玩具模様は疱瘡絵に描かれた玩具と同じデザインのものであった。このことから豆腐小僧は童形の疱瘡神のパロディとして黄表紙本に登場した可能性が考えられた。つまり豆腐小僧は疱瘡神が身をやつしたのではないだろうか。

しかし最初に登場した豆腐小僧は、玩具模様の着物を着ていない。またすべての豆腐小僧あるいは疱瘡神が玩具模様の着物を着ている訳でもない。つまり玩具模様は単に当時流行のデザインにすぎないとも考えられる。そこで、玩具模様以外のファクター、例えば豆腐小僧の被る大笠、豆腐小僧が持つ酒徳利、豆腐小僧が童形である理由、紅葉の意味、また豆腐小僧の足指、類似の妖怪などについても検討した。その結果、着物の柄だけでなく、その他の証拠も豆腐小僧は疱瘡神のパロディではないか、とする演者の仮説を補強するものであった。

結論

豆腐小僧は疱瘡神の「やつし」として黄表紙本に登場したと考える。